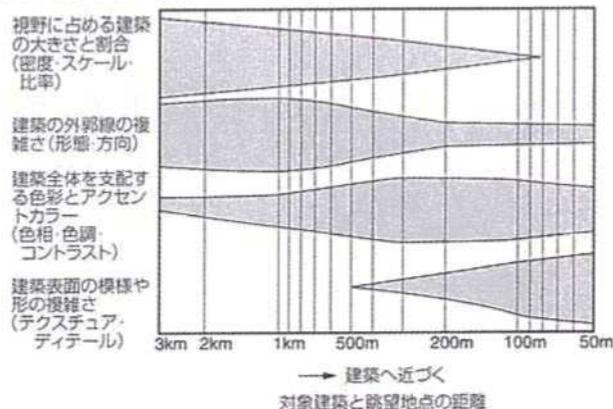


国立・国定公園内における風力発電施設の審査に関する技術的ガイドライン（平成25年3月 環境省）

[技術解説15] 視距離に応じたものの見え方を規定する要因の変化

- 右図は、視距離に応じた建築物の認知を規定する要素（テクスチャ、色彩、形態等）の変化を示したものである。
- これによれば、建築物表面のディテールが視覚的に影響するのは視距離500m程度、色彩の違いが認識されるのは2km程度までとされており、2kmを超えると外観形状や見えの大きさが見え方を決定づける要因となる。
- つまり対象までの視距離が近く、特に風力発電施設の視認規模が大きい場合には、色彩やその他微細なデザインによる景観調和措置が極めて重要になるといえる。



(注) 図は相対的な量関係を概念的に捉えるために作成したもので絶対的な実験値を示すものではない

図16 視距離に応じた認知を規定する要因の変化

資料・画像出典：「風景と建築の調和技術」（1979 進士五十八・麻生恵 国立公園356/359号）

[技術解説16] 自然景観と調和しやすい色彩

- 色彩は、色相（色味）、明度（明るさ）、彩度（鮮やかさ）等で規定される。色相、明度、彩度等を数値化し、体系的に整理・表示したものとしては、「マンセル表色系」（[技術解説17] 参照）が著名である。
- 色彩は視野内に存在する複数色の相互関係によって、調和・不調和が生じることとなる。景観の分野における色彩の調和に関する研究は、様々な分野で取り組まれており、主に右記のような知見が得られている。
- なお、景観の基調をなす色彩は、季節によって変化するものであり、特に積雪地では大きく変化するものであることに注意が必要である。

○無雪期の自然風景地において特に視認性が高いのが「白色」、特に低いのが「茶色」。^{*1}

○（自然景観との調和を考えた場合）濃黄緑、灰、灰/暗茶、明茶/灰赤が好ましい。暗茶、暗灰緑等の地味な色はあまり好まれないがカモフラージュの観点からは有望である。鮮赤、青、オレンジ等の派手な色は好まれない。複数の色の組み合わせでは、対比色より同系色の方が好まれる。^{*2}

○自然風景地で調和しやすい明度/彩度は3.5~5.5/3.0~6.0（無雪季）、4.0~6.0/3.0~6.0（積雪期）である。^{*3}



図17 自然景観と調和しやすい色彩の例^{*4}

<資料・画像出典>

*1：「東京農科大学卒業論文集」（1974 近藤文子）

*2：「自然景観地内建築物色彩イメージについての実験的研究」（1981 麻生恵、永嶋正信、進士五十八、西川生哉、児玉晃 日本造園学会春季大会発表会要旨）

*3：「風景と建築の調和技術」（1979 進士五十八・麻生恵 国立公園356/359号）

*4：「青森県景観色彩ガイドライン」（2000 青森県）

しまね景観色彩ガイドライン（平成13年3月 島根県）

地域Ⅰ（松江地域）



地域Ⅱ（木次地域）



この地図は国土地理院発行の「数値地図 200000（地図画像）」を元に作成しました

しまね景観色彩ガイドライン（平成13年3月 島根県）

山林景観：⑩山中

⑩ 山中

色彩的特徴

谷底では、山肌の落ち葉や笹、また樹木の幹、葉色が近景として視野の多くを占めます。視線上部には、あまり大気の影響を受けない距離にある中景の山腹が見えます。

山の頂上部では、近くの山から遠方の山並みに至るにしたがって、徐々に青みを帯びて空気に溶け込んでいく様子が確認できます。また季節による変動にも顕著なものがあります。

春は若芽の淡いイエローグリーン、夏は濃い緑(オリーブグリーン)、秋はイエロー系やオレンジ系の模様が入り、冬にはイエロー系やオレンジ系に染まっていた部分が枯れてブラウン系になりさらに落葉して枝となり山肌の落ち葉が見えます。

雪が積もると色みは消え濃淡の世界になり、雪の間から見える常緑樹も雪との対比でかなり暗く見えますが、竹藪の明るいイエローグリーンが彩りを添えます。

スギやヒノキの人工林が多いところでは景観色の変化は少なく、自然性の高い混成林では季節変動が大きくなります。



地域の土、砂、岩などの類似色や自然素材で作られ、自然景観に調和した護岸や堰
(現状：上が秋、下が春)

色彩選定のポイント

この地域は樹木の葉色が景観色の大部分を占めます。それが良好な景観の要因となっています。普通の民家も農地もなく、一般的な生活圏ではありません。自然景勝地が多く国立公園や自然公園として親しまれている地域もあり、できるだけ自然景観の印象を変えない配慮が必要です。人工構造物も自然景観に対して融和する色彩が望まれます。

メインカラー／サブカラー選定の考え方

樹木の葉色を中心にした自然景観に融和する色彩は、土・砂・岩などのアースカラーです。周辺の葉色に対して明暗のコントラストを少しつけたアースカラーが、最もよく融和した印象となります。それに対して、明るく、葉色に対して強い明暗のコントラストとなる色をメインカラーとすると、その色が浮き上がって見えます。鮮やかな色と同様に明るすぎる色は自然景観の印象を変えてしまいますので、避けた方がよいでしょう。

広い面積にメインカラー1色を用いるよりも、異なる色を部分的に用いる方が自然景観になじみやすいケースが多くあります。そのようなケースではこのサブカラーで対処してください。サブカラーの範囲はメインカラーより広がっています。

